令和6年度　江戸川区立南葛西第二中学校　学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	国際社会に貢献できる人間の育成を目指して　・人権を重んじ自他を敬愛する(礼儀) ・自主自律の習慣を身に付け将来を目指して自己実現を図る(自律) ・心身を鍛え、個性の発揚を図る(自律) ・所属社会の向上と環境改善を目指して着実に努力する(開拓)	目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	(生徒も、保護者も、地域も、教職員も)互いを大切にし、自他(そして社会)の目標達成のために、ともに高めあえる学校 心豊かで思いやりのある、国際社会に貢献し、自律・礼譲・開拓の精神をもって活躍できる生徒 働き方改革を意識する教職員　生徒に範を示すことを意識する教職員
前年度までの本校の現状	成果 ○落ち着いた学習環境を整備・維持するとともに、機に応じて生徒の主体的な活動場面を企画運営することができた。 ○いじめや問題行動等の未然防止・早期発見・早期解決に寄与する組織的な指導体制が推進できた。 ○特別支援教育への共通理解のもとに、個々の生徒の困り感に応じた個別指導が円滑に実施できた。	課題	○生徒の学習活動に取り組む姿勢は一定程度整っているが、各種学力調査における C層・D層にあたる生徒の割合が引き続き区平均を上回っていること。 ○やむを得ず登校できない生徒の割合が10％を超えており、中長期化を防ぐため、個々の学習支援に加え、関係機関との連携体制を一層整備すること。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」 自己（学校）評価(A～D)		「中間」 学校関係者評価(A～D)		「年度末」 自己（学校）評価（A～D）		「年度末」 学校関係者評価（A～D）		次年度に向けた 改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力の向上	○授業改善の推進、学習の基盤となる基礎・基本の確実な習得、家庭学習習慣に対しての学校の組織的な対応による取組の実施・充実	◎「誰一人取り残さない学力向上アクションプラン」の実効性を高めるために・・・ ○全授業での「目標・めあて」の明確化を行う。	・学力調査におけるC層＋D層の生徒の割合50%以下。 ・学習意欲に関する項目の肯定的意見が都平均を上回る。	C	C	C	国調査の正答率では国語で都より10%、国より7.1%、数学でそれぞれ12%、7.5%下回る結果であり、対策が急務である。	C	学力調査の結果に一喜一憂せず、個々の生徒の学力の向上に期待している。	C	区調査において、1年数学・英語、2年英語の各教科総合において全国平均を上回った。結果分析を行い、成果を生かす。	B	生徒の今後の目標をより高く持たせ、学習習慣を高め、学力向上につなげてほしい。	学力向上に向けた取組の効果を高めるため、生徒・保護者に対して定期的にその意義を伝え、家庭学習の習慣を高める。さらに進路指導の充実を図る中で、より高い目標をもって学ぶ意識づけをする。
		学習機会の確保・充実 ○放課後補習教室【学力アップへのトライ】 ○定期考査前質問教室等の補習機会：年間延べ60回	・週定員90名の充足率80%、出席率80%以上 ・質問教室・補習事業等参加者：1生徒平均5回以上の参加	C	B	C	参加申込者は76名と84.4%の充足率である。その出席率は60%～70%程度にとどまっている現状がみられる。	B	学習習慣の定着は長年の課題。学習機会の確保が大切なので、推進してほしい。	B	参加率については、徐々に低下傾向にあるが、参加継続者は学びの手応えがある。質問教室等の補習機会は確保できた。	B	学びの場の設定は大事なことであり、家庭学習・自学自習の習慣の確立につなげてほしい。	放課後補習教室は、さらに弾力的な運営を行い、参加率・出席率の向上を図る。 学習習慣の定着に向け、学習の成果を校内で共有し、さらに効果的な取組にしていく。
	○読書科の更なる充実	◎調べ学習・探究的な学習等を通じた自ら学ぶ機会の充実 ○タブレット端末の利用促進：綜合・読書科での利活用推進 ○ビブリオバトルの実施	・タブレット端末を活用した生徒成果物制作年間2点以上 ・生徒一人あたり貸し出し冊数：前年比10%増	C	B	C	朝読書は適切に行われており、読書の習慣は身についている。学校図書館の利用率向上はなお課題である。	C	スマホやタブレットで大人も「読書」しているように、本を読む機会が少ない。	B	学習展示会において、各学年ともタブレット端末を活用した生徒成果物を展示した。学校図書館の利用推進策を検討する。	B	図書室利用者が増えるとよい。利用率向上策に期待する。 タブレット端末の利活用では情報モラルが重要。	読書習慣のよさに気づかせ、読書量増加へとつなげる。 探究的な学習を行う力や情報活用能力を高めるとともに、情報モラルを含めた指導を充実させる。
体力の向上	○個に応じた体力向上のための取り組みの実施・充実	◎個々の体力と健康を定着するため、保健体育科での補強運動を毎時間実施する。	・補強運動の各授業での実施により、体力調査において都平均との各項目の差を5ポイント以内とする	B	A	B	体育の授業で体力向上を意識した取組を着実に実施している。体力テストについても適切に実施できた。	B	運動会等では、生き生きと活動する姿が見られた。コロナ禍での運動不足の解消につながっていると感じる。	A	一定の成果が見られたことは大きい。引き続きこの取組を継続してほしい。	A	一定の成果が見られたことをもとに、本校の実態に即した体力向上策を企画・立案するなどして、さらなる体力向上を目指す。	体力調査では一定の成果が得られたことをもとに、本校の実態に即した体力向上策を企画・立案するなどして、さらなる体力向上を目指す。
		○身体を動かし、運動を愛好する習慣を育むため、休み時間等に場の設定を行う。	・生徒アンケート等におけるスポーツへの意識関心に関する項目の肯定的評価80%以上	B	B	B	「健康に過ごすために、学んだことを普段の生活に役立てているか」への肯定的回答は72%である。さらに向上させたい。	B	休み時間によく身体を動かしていると聞く。場の設定は重要。	B	場の設定は行われ、体育館開放やボール貸出についても生徒会主導で行われている。今後も継続し、体力向上につなげたい。	B	楽しんでいる様子が伝わる。生徒会主導であるのがよい。	運動機会の増加につながる運動の場の確保について、引き続き生徒会が主体となって体育館開放等を実施し、運動習慣を定着させる。
		○運動部活動の取組充実 生涯にわたるスポーツへの興味関心を意識させる	・運動部活動所属者におけるスポーツへの肯定的評価80%以上 ・運動部活動所属者の安定的な参加90%以上	B	B	B	運動部活動については、部員数の減少が顕著である。サッカー部については連合部活動・外部団体所属者を受け入れた。	B	設置部活動の減少や部員数の減少は残念。外部指導員等は、時間の制約が厳しい。	B	運動部活動は安定的な活動が推進できていた。外部指導員等の指導者確保により、持続可能性を高めることが課題である。	B	運動系の部活動が、もう少し盛り上がるとよいと期待します。	運動部活動については、外部指導者の確保につとめるとともに、「部活動の地域移行」「働き方改革」の社会的要請に対応した再編成を検討する。
共生社会の実現に向けた教育の推進	○ユニバーサルデザイン等の視点を取り入れた個に応じた指導の実施・充実	◎生徒自らが広く共生社会の実現を目指す力を育むため、校内委員会等の機能強化を図る。	・アンケートにおける共生社会の実現に関する設問の肯定的評価80%以上	B	B	B	「特別支援教育を適切に行っている」には有効回答の77.6%の肯定的回答を得たが、「わからない」との回答が目立つ。	B	以前より落ち着いている印象がある。先生方の地道な取組によるものと考える。	B	校内委員会により、必要な生徒への支援は充実したが、本校の取組の成果について広く周知していく必要がある。	B	対象となる生徒と保護者以外には、特別支援教育の取組や成果が十分に認知されていない可能性がある。	特別な支援を要する生徒が一定数いることを念頭に、校内委員会での情報共有をもとに、保護者との信頼関係を深め、関連機関と連携し、引き続き適切な指導の推進に努める。
	○エンカレッジルームの活用促進	○心を落ち着け、学習活動に向き合える場の設定を行い、別室指導の充実を図る。	・別室指導の実施による集団行動への復帰生徒を対象生徒の80%以上とする	B	B	B	別室を利用する生徒は一定数いるが、人的配置については検討課題。関係機関・サービスの利用も増えつつある。	B	別室指導については、利用者以外は気づかないことも多いと思う。より良い方向に進むことを期待。	B	帝京平成大学との連携により、別室指導支援員が来校する日が増え、利用生徒にとってもよい刺激となっている。	B	大学生とかかわる機会があるのもよい。	次年度以降も帝京平成大学との連携を軸に別室指導の場を充実させ、居場所づくりとともに、集団生活へのスモールステップを確かなものとする。
	○副籍交流、交流及び共同学習の実施充実	○副籍交流等における交流の充実と連携の深化に加え、生徒がその価値に気づく取組を実現する。	・副籍生徒の交流(直接・間接)を学期1回以上実施 ・副籍生徒が来校時に、本校生徒と交流する場を設ける	B	B	B	本年度の副籍交流は間接交流が中心ということとなった。直接交流の機会があった際には、場の設定を行う。	B	共生社会に向けて、学校から働きかけていくのもよい。	B	本年度の副籍交流は間接交流が中心であり、学校便り等の交換等にとどまった。次年度は直接交流の場を設定したい。	B	引き続き継続してほしい。 また、必要に応じて外部機関との交流をすることも価値がある。	学校便り等で特別支援教育の施策や成果、学校の取組に関して、個人情報に配慮して情報提供する。また、外部機関と連携し、共生社会に資する取組を模索する。
不登校・いじめ対応の充実	○豊かな心の育成	◎生徒がよりよく生きていくための様々なスキルや思考力・判断力を身に付けるための指導助言を充実させるため、以下の取組等を実施する。 ○幅広く生徒の情報を共通理解するための校内委員会 ○不登校対策コーディネーター・不登校対応巡回教員との連携 ○教育相談機能の強化	・いじめ継続件数…0 ・登校できない生徒数…前年比50%減 ・SNSに起因するトラブルの未解決数…0	B	B	B	「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」に対して肯定的な回答は95.2%と、都平均を上回っている。	B	以前に比べると、落ち着いてきていると思う。ＳＮＳでのトラブルなどは心配。	B	いじめの認知件数は微増、登校できない生徒は微減にとどまった。SNSに関するトラブルは複雑化しており、留意していく。	B	いじめをはじめとするトラブルが未然防止・早期発見・早期解決するよう、引き続き尽力してほしい。	引き続き、生徒指導連絡会等の校内委員会では生徒の実態に応じて問題行動等の未然防止・早期発見・早期解決に資する具体的な対応策を検討し、組織的な取組を推進する。
	○hyper-QUの活用等		・アンケートにおける学級集団に関する設問の肯定的評価80%以上	B	B	B	hyper-QU等の調査結果を受けて、各生徒の情報共有とフォローについて校内委員会で共有して取り組んでいる。	B	調査の結果を生かすことが重要。良い方向に進むように期待。	B	道徳の授業等を通じて、よりよい集団について考え、意見を表出する機会を各学級でもつ取組は効果的であった。	B	調査結果を生かした授業等の実践は重要である。今後の取組に期待する。	調査結果等を活用し、意図的・計画的に特別の教科道徳の授業等を充実し、自他を尊重し、思いやりのある生徒を育成する。
	○教育相談の強化		・SC、SSW、巡回教員等とのつながりを有しない不登校傾向生徒ゼロ	B	B	B	校内委員会での情報共有を生かし、SSW・巡回教員・SCと担任の共通理解のもと、働きかけを強化することができている。	B	当該の生徒や保護者以外には知られにくい面もあると考える。	B	登校が不安定な生徒で、つながりのない生徒はゼロである。しかしながら、不登校の解決にはなお取組の深化を要する。	B	登校が不安定な生徒に寄り添った解決が進められていると考える。	教育相談機能の充実と、校内委員会での情報共有を通じ、登校できない生徒の漸減に努める。
学校（園）の実現 地域社会に開かれた	○学校ホームページの充実等による広報活動の推進	◎生徒に・保護者に・地域に・教職員に魅力ある学校づくりのため、本校の実態を積極的に発信。	・保護者による学校評価アンケート：肯定的評価80%以上	A	A	A	保護者アンケートでの「情報発信を適切に行っている」への肯定的評価は95.1%であり、一定の評価を得ている。	A	情報発信は適切に行われている。生徒の良さが伝わるよう、引き続き広報に期待する。	A	保護者アンケート「情報発信を適切に行っている」への肯定的評価は90.5%。「教育活動への満足度」向上につなげたい。	A	ホームページ・横断幕等を含め、学校が真摯に魅力ある学校づくりに取り組んでいることが伝わる。	授業参観機会の充実を図るとともに、学校公開に関して広く校内外に周知するなどして、本校の取組や生徒の活躍を知っていただく機会を増やす。
		○ホームページ等による情報発信を充実する。	・ホームページの更新を週3回以上実施し、学校の取組の広報に努める。	A	A	A	ホームページ、学校便りにて、本校の取組を積極的に発信することができた。「研究課題実践推進校」周知にもつながった。	A	ホームページや学校便りで学校の様子がよくわかる。学校の実態が伝わると、噂や風評が収束していくと思われる。	A	ホームページは平均1日1件以上の記事掲載が行えている。1月末までに343件以上の情報発信をおこなうことができた。	A	生徒の活躍の様子や学校の取組を広報することで、学校の良さが伝わる。引き続き頑張ってほしい。	ホームページや学校便りでは、引き続き本校の取組や成果、生徒の様子などを適正に情報発信する場として充実させていく。
	○学校関係者評価の充実	○授業参観機会の提供・保護者による学校評価アンケートの実施・学校評議員会の充実	・保護者アンケート回答率75%以上、その肯定的回答80%以上	B	B	B	保護者アンケートの電子化をおこなったが、回答率は40%台にとどまる現状がある。肯定的回答はおおむね80%を超える。	B	小学生に授業や生徒の実際をもっと見せるとよいのかとも思う。アンケートの回答率は課題。	B	保護者アンケートの回答率は高くて約4割にとどまる。肯定的回答はおおむね80%を超えている。	B	参観機会が増えてきたことはよい。回答率の向上はなかなか難しい問題である。	学校応援団やＰＴＡ、チャレンジ・ザ・ドリーム、関係機関等の協力を受けた成果を広く発信し、学校への支援の輪をさらに厚いものとする。
教育の展開 特色ある	○働き方改革の推進	・ライフワークバランスの推進を通じて、定時外在校等時間を縮減できる業務の精選を行う。	・定時外在校時間80時間以上を3ヶ月連続する教員0名	C	B	C	江戸川区の基準を超過し、要受診とされた教員が2名あった。引き続き「働き方改革」を推進していく。	B	熱心に働いていることを示しているところもあると思うが、健康には留意してほしい。	B	年度前半は基準超過して受診した教員があったが、定時外在校等時間は減少しつつある。引き続き業務の精選を推進する。	A	心身の健康に留意して勤務にあたれるよう、引き続き取り組んでほしい。部活動などの支援や時間の工夫も考えられる。	校務の効率化をさらに推進して、業務改善に関する支援を組織的におこなう。行事等の見直しをすすめる。
	○江戸川区教育課題実践推進校としての研究推進 ○教員研修の実施	・校内研修を「魅力ある学校づくり」「生徒の変容」を視点として実施する。	・生徒アンケート・保護者アンケート「魅力ある学校」との肯定的評価90%以上 ・研究発表会を開催、参加者100名以上。	B	A	B	保護者アンケートでは、「本校の教育活動全般に対する満足度」への肯定的回答は76.5%であった。	B	江戸川区教育課題実践推進校・「プラス１クラス制」の取組に地域も期待している。	A	「江戸川区教育課題実践推進校」研究発表会を「魅力ある学校づくり」をテーマに開催。参会者は50名であった。	A	研究発表会について、研究の取組への評判がいい。先生方の努力が感じられる。	令和8年度の開校40周年を視野に、地域に愛され、地域になくてはならない存在として、魅力ある学校づくりをさらに推進する。
		・若手教員に対する「メンター」による、継続的なテーマを設けた指導の実施。	・若手教員の指導力向上による、校内での研究授業実施数の25%増	A	A	A	メンターを指定した若手教員対象の研修会を新たに設定し、計画通り推進している。	A	世の中ではなかなか教員に対する風当たりがある報道もあるが、生徒のために自信をもって取り組んでほしい。	A	若手教員に対するワンポイント指導を含めた校内での研修は計画通り推進し、各教員は手ごたえを感じている。	A	先生方が意欲的に働いている様子がうかがえる。今後ともがんばってほしい。	本年度の研究の成果でもあり、次年度以降も若手教員に対する支援を充実させ、指導力向上を図る。